

## ニュージーランドの幼児教育を訪ねて

松川 由紀子

昨年の十月、早春のニュージーランドをひとり旅して、幼稚園やプレイセンターなどを訪ねた。オークランド、ウェリントン、クライストチャーチ、そしてカンタベリー平野の小さな町メスベンを訪ね、幼稚園九カ所、プレイセンター五カ所、小学校低学年クラス三カ所、保育センター三カ所、そして教育大学二カ所、合計二十二カ所の教育、保育機関を見学することができた。この国の幼児教育の大体の様子をつかむことができたように思う。幸運にも、見学の際には地域の幼児教育行政官や教育大学の先生たちが案内して下さったので、説明も的確で、とても充実した機会であった。また、旅行中はほと

んど教育大学の先生の家庭に泊めていただいたので、グループ旅行では味わえない、この国の人々の日常生活にも若干ふれることができた。ニュージーランドの幼児教育については、教育省の幼児教育専門官マイケル・クーパー氏によって本誌に紹介していただいているので、ここでは、見学した感想を若干記したいと思う。その前に、この国の幼児教育制度の概要を少し話しておきたい。

日本とは異なり、幼児教育は三、四歳児が中心で、五歳児は小学校に行く。中心的な機関は、教育省の関係する幼稚園とプレイセンター、社会福祉省の関係する保育センターである。現在、三歳児の半分、四歳児の約八十

四パーセントがこうした機関に通っている。大体、三、四歳十人のうち、三・八人が幼稚園、一・三人がプレイセンター、一・一人が保育センター、〇・七人がプレイグループ、合計六・九人が何らかの幼児教育、保育を受けている。

ニュージーランドは、人口約三一六万人（一九八〇年）、面積約二十七平方キロメートルの小さな島国である。人口密度が低く、温暖な西岸海洋性の気候のため、緑の空間が多く、人々の生活はともゆったりしているという印象をもった。国民のほとんどはイギリスからの移住者であるが、原住民のマオリ族、南太平洋諸島からの移住者が混合していて、そのためにいくつかの特色ある教育政策がみられる。印象的であったのは、ウェリントンの幼稚園を見学した時、子どもたちの人種がまちまちであったことである。郊外のペトーネ幼稚園には、建物のなかに話し合いのできるコーナーが設置されていて、幼稚園の先生と親たちによっていろいろなミーティングがなされているところであった。幼稚園ならびに幼児教育の

大切さを親たちに理解してもらい、彼らの相談に応ずるようにしている主任教師の献身的な姿勢がともさわやかであった。そこには、親たちの子育てをあくまで援助していくという姿勢がたらぬかれていた。初期の幼稚園運動の創始者たちの子ども達の発達を守るといふ姿勢に通じるものを見るような思いであった。また、ストラスモアパーク幼稚園には、十カ国の子どもたちが通っていて、幼稚園の生活のなかで英語が話せるようになっていく子どももいるということであった。この国は、人種の混合に対して差別意識がなく、むしろ、文化的発達の遅れる子どもたちの教育対策に積極的に取り組んでいるのである。そして、教師たちの姿勢のなかにも献身的と思えるような熱意が感じられる。

また、わずか人口千人の小さな町メスペンのプレイセンター、小学校を訪ねた時、貧弱な印象はまるで受けなかった。教育政策が、国のすみずみまでゆきとどいてるのである。あたりは、たくさん羊がゆったり群れるのどかな牧歌的な地であった。

幼稚園やプレイセンターを見学した時の一般的な印象としては、日本の幼稚園や保育所に比べると、一見したところ、とてもゴタゴタしているという感じである。よく見ると、子どもたちが自由にいつでも使って遊べるように、各コーナーのそれぞれの棚や台上に非常に多くの遊びの材料が所狭して置かれていたり、子どもたちの描いた絵や製作した作品（粘土、切り紙など）があちこちに並べられていたりする。徹底した自由遊びが子どもたちに保障されているのである。それは、小学校低学年のオーブンクラスを見学した時も同様であった。五、六、七歳児がそれぞれ好きなコーナーで自由に遊んでいて、外見は幼稚園とほとんど差がない。教師は、子どもたちの様子を見ながら、時たま、いくつかのグループに分かれて活動するという時間をもつのである。ほとんど全員が五歳児の誕生日の翌日から小学校に入学するのであるから、ひとりひとりの発達に応じた取り組みを教師はすることができるといえる。日本のように、四月一斉に入学して教室にすわられる、というわけではないのである。

子どもたちひとりひとりの興味、関心を大切に育ていくという幼児教育の方針は、自由遊び重視の教育とともにいろいろなところでみることができる。子どもたちの入園の日はまちまちであるし、朝はいつ登園してもよい。また、いつでもおやつを食べてもよい。勿論いつ降園してもよいのである。それぞれの子どもにあった教育の時間、おやつの時間が考慮されているのである。日本の一斉保育のやり方になれている者から見ると、とてもルーズに思えるかもしれない。

また、各地で案内、説明していただいた幼児教育行政官や教育大学の先生たちの印象も忘れられない。きびきびした行動、説得力のある会話からは、自信をもって仕事にあたっておられる様子が伝わってきた。彼女たちは皆、かつてはベテランの現場の教師であった方々で、なによりも明るく、やさしい人たちであった。こうした人々と友だちになれたことは最大の収穫であっただろう。地域の幼児教育を心から愛し、守っている行政官たちの誠実な姿勢、養成面に打ち込んでいる教育大学の先

生たちには、本当に頭の下がる思いであった。事務室の壁にはその地域の実情を示す資料がたくさん掲示されていて、それを見ながら説明して下さったのだが、仕事に情熱をそそいでいる人々の話は、とても気持ちがいい。オーランド教育大学のブロックett先生の夜間の幼児教育講座に参加した時の印象も忘れられない。講義をする側も聴講する側もとても熱心である。まずその熱意に関心した。また、同大学のキーン先生が、乳幼児保育の面

はまだ遅れていて、職業を続ける婦人たちは大変であると真剣に話しながら、保育センターを案内して下さったが、その先生の姿も忘れられない。そして、クライストチャーチ教育大学のハギット先生の研究室では、学生たちのやる気を起こさせることが大切であると話されながら、先生手づくりの教材をあちこちの棚から取り出して見せて下さった時、同職の者として、ガーンと頭を打たれたと思ったのであった。ウェリントンのニュージールランド教育研究諮問機関を訪ねた時には、スタッフの婦人研究者の方々の真剣な研究態度にふれることができた。

こうした多くの人々との出会いはとても貴重なものであった。全員が、仕事に自信と誇りをもっていた婦人たちであった。いずれも、この国幼児教育を支える第一線の面々で、彼女たちの風姿は忘れられない。

特に、このたびの旅行で考えさせられたことは、特徴的なプレイセンタールの制度と幼児教育方法のことである。プレイセンタールについては、クーバー氏の報告をお読みいただきたいが、とてもユニークなものである。教育方法面で関心したことは、徹底した自由保育と棚いっぱいの遊びの材料（教師の工夫した手づくりのものも多くみられる）である。そして、そこに流れる幼児教育に対する親の熱意と教師の熱意、それを支える幼児教育行政。私にとって本当によい勉強になった旅である。

こうした充実した旅になったのも、在日ニュージールランド大使館ならびに本国教育省の方々のあたたかいご配慮のおかげである。心から感謝申し上げたい。そして、これからニュージランドと日本との交流がより実りあるものになるよう祈りつつ、ペンを置く。（山口女子大学）